

1950年代うたごえ運動論

河西, 秀哉 / Kawanishi, Hideya

(出版者 / Publisher)

法政大学大原社会問題研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

大原社会問題研究所雑誌 / 大原社会問題研究所雑誌

(巻 / Volume)

707・708

(開始ページ / Start Page)

7

(終了ページ / End Page)

19

(発行年 / Year)

2017-10-01

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00014280>

1950年代うたごえ運動論

河西 秀哉

はじめに

- 1 近年の研究について
 - 2 戦前からの連続性
 - 3 敗戦後の労働・文化状況
 - 4 うたごえ運動の展開
 - 5 うたごえ運動の転換
 - 6 広義の「うたごえ」に関する運動
- おわりに

はじめに

本稿に与えられたテーマは、1950年代日本の労働者文化運動のうち、うたごえ運動について論じるというものである。とはいえ、本稿では狭義の「うたごえ」に関する運動だけではなく、広義の「うたごえ」に関する運動についても論じてみたい。

まず、この狭義と広義について説明しよう。狭義の「うたごえ」とは、いわゆるうたごえ運動と言われるものを本稿では指す。敗戦後に再建された日本共産党は職場における文化サークル組織を支持してその強化を目指す方向性を打ち出し、1946年2月に日本青年共産同盟（青共）第1回大会を開催する。文化運動を重視する同党の方針は、うたごえ運動の誕生に大きな影響を与えていく。この動向と前後して、マルクス主義者や自由主義的知識人らが参加した民主主義文化団体が相次いで設立された。そして、敗戦後に復興した民主主義文化団体を結集する形で、日本民主主義文化連盟（文連）も同じ月に設立される。文連は文学・映画・演劇・音楽などの分野別のサークル協議会を組織し、文化人と勤労者双方が協同し相互に学び合う形での文化運動を構築していった⁽¹⁾。

この文連結成に参加して音楽部門の指導を担当したのが、その後うたごえ運動の指導者となった関鑑子である。関は敗戦後、自宅で歌の集いを行っていたが、同時期に共産党で文化工作活動を展開していた蔵原惟人の訪問を受けて励まされたこともあり、積極的に文化運動へと参画していく

(1) 高岡裕之「敗戦直後の文化状況と文化運動」(『年報日本現代史』第2号, 1996年, 182～186ページ)。

ことになる⁽²⁾。

同時期、青共でも文化工作の一環としてコーラス隊の結成が構想され、1947年12月に青共中央コーラス隊が結成された。そして、関はその指導にあたることになった。コーラス隊は翌年に団体名を青共中央合唱団と改称し、正式に創立に至った。このように、中央合唱団は共産党の文化工作の一環として組織され、関は指揮者としてかかわったのである。これが、うたごえ運動のスタートである。その後、中央音楽院が設立され、次第に全国各地から人々が運動に参加していく。また関の発案により「みんなうたう会」が始められ、その後に全国各地に組織される職場合唱団やうたごえサークルの基盤となった。そして、うたごえ運動は全国的に広がりを見せていく⁽³⁾。本稿が狭義の「うたごえ」に関する運動とするのは、この関鑑子・中央合唱団・みんなうたう会に連なるうたごえ運動のことを指す。

なお、青共中央合唱団は1949年2月に青共が民主青年団（民青）に改称したことを受けて、団体名を民主青年団中央合唱団に変更する。しかしその後、民青との関係性が希薄になっていたこと、うたごえ運動を共産党の文化工作よりも幅広い民主運動として拡大していく意識を合唱団が有していたから、1951年6月には民青からの独立が決定され、中央合唱団と改称された。この中央合唱団がうたごえ運動の中央（東京）における中心であり、その指導者である関鑑子は運動のカリスマ的存在であった⁽⁴⁾。

しかし、同時期のコーラスにかかわっていた労働者がすべてうたごえ運動にかかわっていたのかというと、そうではない。それとは異なる場所で、合唱に参加する労働者は多数いた。本稿では、広義の「うたごえ」に関する運動として、狭義の「うたごえ」に関する運動に参加していない、それとは一線を画すこれらの動きについても検討をしてみたい。

1 近年の研究について

本特集でうたごえ運動が取りあげられている理由の一つは、2000年代になってうたごえ運動の研究が進み、その実態が明らかになったからだろう。なぜ近年、うたごえ運動の研究が進んだのだろうか。まずその研究の特徴を見ておきたい。

第一に、音楽学的な関心からうたごえ運動全般を検討し、その意味を解明しようとしたものである。そのなかで最も網羅的かつ体系的にうたごえ運動を検討し、それを総体として把握したのが長木誠司の研究である⁽⁵⁾。長木は戦後日本の音楽史を叙述するなかで、うたごえ運動について取りあげた。長木は狭義の「うたごえ」に関する運動のみならず、戦後の合唱に関する歴史、つまり広義の「うたごえ」に関する運動を含む人々が歌うという営みの意味を歴史的に明らかにしている。そ

(2) 青地晨「関鑑子伝」（『知性 増刊日本のうたごえ』河出書房、1956年、133ページ）、関忠亮「大河となる歌ごころを」（井上頼豊編『うたごえよ翼ひろげて』新日本出版社、1978年、179ページ）。

(3) 甫出頼之「うたごえ運動の歴史的展開」（『エリザベト音楽大学研究紀要』第22号、2002年、69～70ページ）。

(4) 河西秀哉「関鑑子」（吉田裕・高岡裕之他編『アジア・太平洋戦争辞典』吉川弘文館、2015年、336～337ページ）。

(5) 長木誠司「運動（ムーヴマン）」としての戦後音楽史1945～9～14（『レコード芸術』第53巻9号～第54巻2号、2004～2005年、後に長木誠司『戦後の音楽』作品社、2010年に収録）。

これまで、音楽学のなかでうたごえ運動が本格的に研究されることはほとんどなかった。その理由として、狭義・広義ともに「うたごえ」に関する運動の担い手の多くがアマチュアであり、詳しくは後述するように狭義の「うたごえ」に関する運動は政治社会的背景を有していたことから、職業的音楽家の検討を中心とした音楽学の分野ではなじまなかったと考えられる。

とはいえ、音楽はそうしたプロフェッショナルのみによって担われるわけではない。むしろ、多くの市井の人々が参加し、発展してきた経緯があった。長木はそこに目を付けた。長木の研究は、戦後日本の音楽史を社会的な背景とともに捉えることを目的としており、そのなかでうたごえ運動を検討し、その意味を考察したものであった。それは、クラシックや現代音楽などを中心に切りあげたある種の音楽評論的な歴史叙述ではなく、人々の生活・社会との関係性をも含み込んだ形で音楽を総体的に把握する試みであったと言える。

こうした長木の提起を受け、音楽学でもうたごえ運動の研究が進んでいく。甫出頼之は初期のうたごえ運動の歴史的展開をコンパクトにまとめ⁽⁶⁾、「ヒロシマ」表象とうたごえ運動との関係性を取りあげた能登原由美、昭和30年代の民謡ブームとうたごえ運動の関係性について検討した寺田真由美や輪島裕介⁽⁷⁾も、人々の民俗的な習慣やヒット曲といった社会状況とうたごえ運動を密接に絡めて論じている。また、日本近現代の歌うことの歴史を論じた渡辺裕、日本近現代における合唱の歴史を通史的に描いた戸ノ下達也・横山琢哉は、労働者を含む多くの人々が声を合わせて歌ってきたこと（つまりは広義の「うたごえ」に関する運動）を重視した⁽⁸⁾。こうした研究が出ること自体、長木の問題意識を受け継ぎながら、音楽を広い視野のなかで把握する傾向が定着したと言える。渡辺、戸ノ下・横山のいずれの研究でも、やはりうたごえ運動（狭義の「うたごえ」に関する運動）に言及されている。このように、近年になって、日本近現代の音楽の歴史のなかでのうたごえ運動の重要性が強調され始めたのである。

第二に、歴史学・思想史のなかからうたごえ運動を検討した研究もある。こうした研究は、具体的な団体・地域のうたごえ運動を取りあげ、検討対象としているケースが多い。サークルに集う労働者の意識を解明する一つとして国鉄のうたごえ運動を取りあげた三輪泰史、1950年代の炭鉱労働者によるうたごえ運動を取りあげた水溜真由美、1958年の王子製紙争議におけるうたごえ運動を論じた岸伸子、東京南部におけるうたごえ運動の状況を取りあげた道場親信、労音を検討するなかでうたごえ運動について取りあげた長崎励朗、繊維女性労働者のサークル運動を検討するなかでうたごえ運動について言及した辻智子、京都府の被差別部落やその後にはフォークなどでも歌われた「竹田の子守歌」を通して1960年代の京都におけるうたごえ運動の展開過程を解明した武島良

(6) 甫出前掲「うたごえ運動の歴史的展開」。

(7) 能登原由美『「ヒロシマ」が鳴り響くとき』（春秋社、2015年）、寺田真由美「うたごえ運動における民謡の意義」（『表現文化研究』第3巻第1号、2003年）、輪島裕介「三橋美智也とうたごえ運動」（細川周平編『民謡からみた世界音楽』ミネルヴァ書房、2012年）。

(8) 渡辺裕『歌う国民』（中公新書、2010年）、戸ノ下達也・横山琢哉編『日本の合唱史』（青弓社、2011年）。戦後日本社会における表現方法として歌うことに注目した大門正克「戦後日本の暮らしと大衆文化」（国立歴史民俗博物館＋安田常雄編『歴博フォーラム 戦後日本の大衆文化』東京堂出版、2012年）も、うたごえ運動に言及している。

成など、一次史料を丹念に発掘し、聞き取りなども駆使した実証的で優れた研究が多い⁽⁹⁾。

こうした研究が近年に出てきた背景には、社会運動史の再検討という歴史学の課題があろう。従来の社会運動史研究が運動の形態や展開過程といったハードの側面に焦点を当てていたのに対し、近年の社会運動史はその担い手の意識といったソフトの側面に注目されることが多い。そして、社会運動史のなかで取り組まれた文化的な活動の一つとしてうたごえ運動が検討され、その担い手の意識が解明されるようになったのである。その結果、なぜ人々はうたごえ運動というサークル活動に参加したのか、明らかになりつつある。

このうたごえ運動におけるサークルという側面も、近年に研究が進んだ要因の一つである。近年、歴史学だけではなく思想史学・日本文学・社会学なども含めて、サークル運動の研究が盛んである⁽¹⁰⁾。前述した研究者もここに数多く参加している。そしてサークルの一形態として、うたごえ運動にかかわるサークルが取りあげられた。1990年代以降冷戦構造が変容・解体するなかで歴史研究も変容を見せており、サークル研究が進んだ背景にはそうした政治社会状況や研究関心の変化と大きくかかわっているように思われる。世界史的関心から現代史への注目が集まったこと、そして社会構造の把握ではなく、生活を営んでいる人々の実態に対して関心が高まったからではないだろうか⁽¹¹⁾。音楽学でも歴史学・思想史でも日本文学・社会学でも、政治や社会を中心的に動かしている人々への関心だけではなく、労働者など私たちの歴史を掘り起こそう、描こうという動きが近年高まり、うたごえ運動にも関心が寄せられた結果、研究が進展したと思われる。

2 戦前からの連続性

はじめに述べたように、うたごえ運動は敗戦後にスタートしている。しかし、その前提は戦前からあったと思われる。ここではそれについて検討してみたい。

指導者の関鑑子は東京音楽学校声楽科を卒業後、1926年に築地小劇場の小野宮吉と結婚、小野は同年にマルクス主義芸術研究会に参加（後に日本プロレタリア芸術連盟に吸収される）した演劇人であり、関もその影響を受けてプロレタリア芸術運動に参加していく。1929年に結成されたプロレタリア音楽家同盟（PM）でも、関は中心的な音楽家として活動していた。小野が海外の革命歌を訳したり、彼が作詩・関が作曲した〈労農党の旗の下に〉という曲が発表されたりと、プロレタリア音楽運動のなかで関夫妻は活躍し、世間に名が知られるようになっていた。1930年代に入ると左翼運動への弾圧もあり、関の活動は停滞を余儀なくされるが、戦前の関の活動が、敗戦後に

(9) 三輪泰史「紡績労働者の人間関係と社会意識」（『歴史学研究』第833号、2007年、後に同『日本労働運動史序説』校倉書房、2009年に所収）、水溜真由美「1950年代における炭鉱労働者のうたごえ運動」（『北海道大学文学研究科紀要』第126号、2008年、後に同『「サークル村」と森崎和江』ナカニシヤ出版、2013年に所収）、岸伸子「王子争議をうたごえ運動とともに」（『女性史研究ほっかいどう』第3号、2008年）、道場親信「『原爆を許すまじ』と東京南部」（『原爆文学研究』第8号、2009年）、同『下丸子文化集団とその時代』みず書房、2016年）、長崎励朗「『つながり』の戦後文化誌」（河出書房新社、2013年）、辻智子『繊維女性労働者の生活記録運動』（北海道大学出版会、2015年）、武島良成「『竹田の子守歌』の文脈」（『部落問題研究』203号、2013年）。

(10) 代表的な研究として、宇野田尚哉他編『「サークルの時代」を読む』（影書房、2016年）などがある。

(11) その結果、サークル運動の雑誌などを含めた一次史料の整理・復刻刊行などが進んだ。うたごえ運動の史料に關しては、道場親信・河西秀哉編『「うたごえ」運動資料集』全6巻（金沢文圃閣、2016～2017年）が刊行された。

うたごえ運動の指導者として迎えられていく要因になっていく⁽¹²⁾。すでにうたごえ運動が始まる前から、関鑑子の名前は知られており、彼女をうたごえ運動の指導者として迎えることで、運動がそうしたプロレタリア音楽運動と同じ方向に進むことが規定されていたとも言えるだろう。

別の方向からも、うたごえ運動に継続する戦前の動きがあった。1930年代になると大衆社会化・資本主義化がより進んだことで、労働者への自己規律的生活態度を求める経営方針が拡大し、レクリエーション運動が活発化して日本へ移入された。そしてその一環として、民間企業内にも職場合唱団が次第に組織されるようになる。1937年7月には日中戦争が勃発、8月には国民精神総動員運動が開始される。この運動の展開によって、文化活動においても「上から」の統制や再編が積極的に行われていく。そして展開された厚生運動では、「健全娯楽」の提供によって人々のエネルギーを体制内へと吸収することが目指された⁽¹³⁾。戦争は人々に常に生産性の向上・能率性を強い、「上から」の統制が長期化すればそれだけ人々の緊張感が崩れて弛緩し、「不健全」さが表出する問題も内包していた。それゆえに戦争が継続するなかで、人々に「健全娯楽」を提供してそうした不満を抑止する厚生運動が重要性を増していく。

1940年11月に発会した大日本産業報国会（産報）は、内務省・厚生省の指導の下に労働組合を一元的に管理し、労働者を総力戦体制に組み込んだ。産報は、厚生運動によって労働者の娯楽や文化を全体主義的に再編することを目指す。音楽（合唱・吹奏楽・ハーモニカ）では具体的には、勤労者音楽大会の開催、講習会や巡回指導の実施、勤労者向けの厚生音楽の選定などの事業が行われた⁽¹⁴⁾。こうして労働者と音楽はこの時期、結びついた。

勤労者音楽大会では産報は技術を競う以上に、職場の一体性を強固にするために参加することの意義を求めた。「健全娯楽」を労働者に提供し、総力戦体制に取り組む自覚を養わせる意図がそこには存在した。講習会や巡回指導についても、いかに職場の音楽を推進する主体を形成していくのかという観点が重要視されていた。産報は厚生音楽巡回指導班を組織し、音楽家を各地域に派遣して巡回指導・講習会を開催していく。産報は専門家による指導を強化することで、各地域における厚生運動の定着・発展を企図したのである。講習会や巡回指導によって、日常の厚生運動を主導するリーダーを育成するとともに、厚生運動の論理や意図を職場に広めることが目指されていたのである⁽¹⁵⁾。

敗戦によって、以上のような運動は消滅する。しかし、戦時中にこれほどまでに大規模に労働者に向けて音楽が提供され、運動が取り組まれたことの意味は大きかった。それまで合唱に取り組んだこともなかった人々がそれを経験したからである。これにより、労働者たちが音楽に取り組むことへの抵抗感は下がった。しかも、厚生運動では総力戦体制のなかで、担い手たちの主体性を喚起する方策が採られた。その経験も、彼らが敗戦後に主体的に職場のなかでサークルを結成し、うたごえ運動を担っていく素地になったのである。

(12) 三輪純永『グレート・ラブ』（新日本出版社、2013年、32～47ページ）。

(13) 高岡裕之「総力戦と都市」（『日本史研究』第415号、1997年、154ページ）。

(14) 高岡裕之「十五年戦争期の「国民音楽」」（戸ノ下達也・長木誠司編『総力戦と音楽文化』青弓社、2008年、45～46ページ）。

(15) 河西秀哉『うたごえの戦後史』（人文書院、2016年、15～44ページ）。

3 敗戦後の労働・文化状況

アジア・太平洋戦争の敗戦によって、GHQは日本の「民主化」を促進した。その政策の一つとして、労働組合の結成が奨励され、組織化が図られる。企業ごとに組合の結成や産業別の連合体が生まれるその過程で、1946年8月には戦前の伝統を有する日本労働組合総同盟（総同盟）が復活する。これに対して、共産党の影響が強くその指導下にあった組合は、全日本産業別労働組合会議（産別会議）を結成し、時に政府の方針に対抗しながら労働運動を展開させていく⁽¹⁶⁾。この年の5月に再開された敗戦後初の中央メーデーでは、メーデー歌〈赤旗〉〈インターナショナル〉が歌われ、関鑑子が指揮をした。

先述したように、こうした状況のなかで文化人団体を結集する形で文連が結成され、産別会議も文化部を設置、労働組合の文化運動と民主主義文化運動とを結びつけて展開していく方向性を示していく⁽¹⁷⁾。文連は1946年8月に「働く者の音楽祭」を開催、47年3月には50ほどの職場音楽団による関東自立楽団協会が発足するなど、労働者による組織的な音楽運動が開始されていく。この時期は労働歌の創作も目指され、1946年11月には産別会議や総同盟などが共同で、メーデーで歌う新作労働歌を公募する試みも行われた。ここには、文連やNHK、新聞社なども協力するなど、労働と文化を結びつける運動が展開されていた。関はこの労働歌の審査にも関係している。しかしこうした活動を通じて関は、労働組合が援助してサークルを作り、音楽の専門家が協力して音楽を教えるというスタイルでは大衆的な音楽活動に繋がらないと感じるようになった⁽¹⁸⁾。人々のより自発的な動きによって音楽活動がなされていく必要性を関は痛感したのである。そうした時に、青共はコーラス隊を結成し、敗戦後活動を再開していた関に対して指導を依頼した。

中央合唱団は当初は民青の組織であった以上、その主張のなかには共産党の影響を受けた政治社会性が見られた。当初は「民主化」政策のなかで政治運動・社会運動は奨励され、共産党の影響を受けた文化運動も、前述したように積極的に展開されていた。しかし東西冷戦構造の構築によって、占領政策は次第に転換し始める。この「逆コース」によって、共産党や労働運動に対してもこれまでの政策は転換し、その勢力は衰退し始めた。1948年には共産党の組合支配に対する反発から産別会議が分裂、労働運動の中心は1950年7月に結成された日本労働組合総評議会（総評）に移っていく。そして、敗戦直後から行われていた民主主義文化運動も衰退していった。この頃に中央合唱団は民青から独立していき、総評と積極的に結びつきを強めていく。この過程を見れば、うたごえ運動は共産党の影響下で始まったものの、もともと敗戦直後は文化運動に広い勢力が結集しており、そのなかで展開された運動だったと評価できる。そして政治社会的な過程のなかで共産党への弾圧が始まり、幅広い勢力での文化運動が展開できなくなると、うたごえ運動の裾野をそのまま広く維持するために共産党から独立した。うたごえ運動に参加していた人々のなかには、共産党の影響を受けた参加者も多かったと思われるが、1950年代は運動に対して共産党からの強い指令

(16) 松尾尊兌『国際国家への出発』（集英社、1993年、71～72ページ）など。

(17) 高岡裕之「ゼネスト・労働運動」（戸ノ下達也編『戦後の音楽文化』青弓社、2016年、83～85ページ）。

(18) 藤本洋「一人の心臓のときめきを万人の鼓動に」（井上前掲『うたごえよ翼ひろげて』28～29ページ）。

や指示はなかったと考えられる。とはいえ職場において、うたごえ運動のサークルが「アカ」だとしてつぶされるケースもあった。こうした状況を受け、うたごえ運動を通じて「逆コース」への批判と「民主化」運動を展開していこうという方向が強まっていく。

4 うたごえ運動の展開

うたごえ運動では当初から中央合唱団の団員が地域の職場などへ赴き、積極的に歌唱指導を行っていくことで、全国に運動が拡大していく。中央合唱団が各地で公演を行い、それが契機となって地域にうたごえ運動の合唱団が結成されることも多かった。またそれぞれの地域に地域の中心合唱団が出来、そこで音楽に関する知識を学んだ団員が職場や地域のうたごえ運動サークルで指導する。このような張りめぐらされたネットワークも、うたごえ運動が全国に広がっていった要因であった。また前述のように敗戦後に労働運動が盛んになっていくことも、うたごえ運動が急速に広がっていく背景にはあった。うたごえ運動は頻発する労働運動とそこに集う活動家との関係性を強く持っていく。うたごえ運動で歌われた歌のなかには新しく作曲された労働歌もあり、労働運動や労働者を励ます作用があったことも、労働運動のなかでうたごえ運動が広がっていく理由となった。

その意味で、繰り返しになるが、うたごえ運動は共産党の影響を受けた運動という性格だけではなく、1950年代に広がった民主主義を守る運動・平和を求める運動として展開されたのである。うたごえ運動のなかで平和を求める動きは大きかった。平和を求める歌が積極的に歌われ、党派性を越えて人々の共感を得た。1950年代前半には反基地闘争や原水爆禁止運動に見られるように、人々の反戦・平和要求の機運が盛りあがった。そして、労働者の祭典であるメーデーにおいてもうたごえ運動が大きくかかわった。集会やデモ行進ではシュプレヒコールを挙げるだけではなく、参加者がみなで歌を歌い、それによって主張を訴え団結を高めた。社会運動を盛り上げるためにうたごえ運動が展開されたのである。様々な社会運動において展開されたうたごえ運動は、そこから全国へと広がる効果を有していた。争議などの後、それまでうたごえ運動にかかわっていなかったような人々が地元に戻り、その時の経験を基にうたごえサークルを結成するケースもあった。

1954年3月の第五福竜丸事件などを経て高揚する原水爆禁止運動においても、うたごえ運動は積極的に関与している。〈原爆を許すまじ〉（浅田石二作詩、木下航二作曲）はその時に創作された曲であり、うたごえ運動において最も著名な曲の一つとなった。うたごえ運動のなかで平和を求める動きが高まり、そして平和を求める歌が作られ、この時期に盛んであった社会運動・平和運動と結びついていくことでより発展していった。

1952年には、全国の職場におけるうたごえサークルを集めた第1回「日本のうたごえ」祭典が開催された⁽¹⁹⁾。「日本のうたごえ」祭典は翌年以降も開催され、参加者人数を増加させていく。このように、うたごえ運動にとって「日本のうたごえ」祭典はその運動が広がっていることを示す大きなイベントとなっていった。うたごえ運動では、この時期から「うたごえ運動は新しい段階に

(19) 「日本のうたごえ 1952年——中央合唱団4周年記念公演」パンフレット（前掲『うたごえ運動資料集』第3巻所収）。

入りました」との認識を有していた⁽²⁰⁾。運動が拡大し、そのなかで新しい創作曲や活動が生まれ、演奏表現に関する討論や指導・教育についての研究活動も盛んになってきたからである。

うたごえは、いま、民族の音楽をつくり、ひろめほりおこし、日本人のよりよい平和な生活をかちとるために、潮のような勢いでかぞえきれない多くの人々によって支えられ、進められていっているのです。

このようにうたごえ運動は、平和運動が盛んに展開されているなかで自身の運動が次第に広がっていったと考えていた。だからこそ、「日本のうたごえ」祭典において、〈原爆を許すまじ〉のように平和を訴えかける歌を盛んに歌った。1950年代の社会的な問題を背景に、うたごえ運動は「新しい段階」に至ったと自己認識していた。

一方でうたごえ運動はまた、こうした社会運動・平和運動としての意味だけでなく、職場のサークルとしての意義も大きかったと思われる。労働者は職場の仲間どうして気楽に集い、歌うことによって楽しむ感情を有していた。残業という労働のつらさを解消するものとして、参加者たちはうたごえ運動を捉えていた。うたごえ運動は職場のレクリエーション、サークルとしての意味合いを持っていたのである。歌を歌うことによって心身の解放・日々の生活の苦勞の緩和、日常の糧になる作用があり、それゆえにうたごえ運動は広がっていた。みんなで歌うことによって、そうした作用が浸透する意図をうたごえ運動は持っていたのである。そしてうたごえ運動が職場の人間関係の触媒になることもあった。うたごえ運動を通して、歌だけではなく職場の人々が集うこと・話し合うことが頻繁に行われるようになり、職場の人間関係が親密になっていく。うたごえ運動は実際に歌うだけではなく、参加者どうしが自身の意見を訴えながら、相手の意見にも耳を傾け、運動を展開する意識を有していた。うたごえ運動に参加した人々のなかには、政治社会性ではなく、こうした点に魅力を感じていた者も数多くいたのではないだろうか。

そのような意義でうたごえ運動に参加していた人々にとって、共産党の運動や「アカ」と見られることには抵抗感が存在した。みんなで一緒に歌うことを重要視し、だからこそ彼らはうたごえ運動の歌に政治的な部分があることも批判していた。そして、そうした思想を越えたところで歌を通じて繋がることを訴えたのである。それは、うたごえ運動により広がりを持つ運動であることを求めるものであった。共産党の文化運動にとどまらない、サークルとしての繋がりを希求し、思想を越えた歌の集団としてのうたごえ運動を求める参加者の存在があったと思われる。

5 うたごえ運動の転換

こうして拡大していったうたごえ運動を、1955年になるとマスメディアが大きく取りあげるようになる。その端緒である『サンデー毎日』『週刊朝日』の記事⁽²¹⁾はともに、うたごえ運動がブームとなっている理由や背景について、運動を知らない人々に紹介する目的だった。このメジャーな週刊誌に取りあげられたことで、うたごえ運動はより一般にも知られるようになった。それまでマスメディアがほとんど注目していなかったにもかかわらずこのような紹介記事が書かれたのは、そ

(20) 『うたごえ新聞』第1号、1955年4月7日（前掲『うたごえ運動資料集』第2巻所収）。

(21) 『サンデー毎日』1955年5月28日号（22～23ページ）、『週刊朝日』1955年6月26日号（3～11ページ）。

れだけこの時期になると運動が高揚して世間でも放っておけない現象になっていたからであった。これらの記事をきっかけにして、うたごえ運動はより世間的にも注目され、一般に知られたものになっていく。

その後、新聞でもうたごえ運動に関する記事が掲載され、その賛否が問われるようになった⁽²²⁾。そのなかでは、うたごえ運動が広がっているのは歌いやすい歌・健全な歌を歌っているからであり、それはこれまで社会教育が軽視してきた側面ゆえに人々に受け入れられたとする賛成意見、うたごえ運動は全体的には共産党による組織的な動きのなかにあるとしてその政治性を批判する反対意見が展開された。1955年になると新聞という一般的なマスメディアのなかで、うたごえ運動に関する意見が戦わされることになった。それだけうたごえ運動が広がりを持ち、人々に影響を与え始めていたからであろう。大手メディアも無視できない勢力となっていたのである。

ところで、うたごえ運動を取りあげたのはメディアだけではなかった。文部省も、うたごえ運動の学校現場や社会への浸透に危機感を持ち、それを止めるための方策を実施しようとする。文部省をも動かすほどに、うたごえ運動は大きくなっていったと言える。この年の7月、共産党はそれまでの武装闘争方針を放棄したものの、そのイメージは根強く、うたごえ運動は共産党による革命のための文化工作と見られる意識が強かったものと思われる。一方で合法活動路線への転換は、共産党がうたごえ運動のようなブームと結びついていたとすれば、それが人々に浸透してデモや投票行動へと発展し、政権にとっては脅威となり得ることも予想された。それゆえに文部省はその対策に乗り出したのである。

対してうたごえ運動側は、批判を受けても当初は方針を転換しなかった。先述したように、平和を訴えかける社会的な意識を背景に「新しい段階」に至った＝人々に浸透し広がったと考えていたうたごえ運動側は、その旗印を降ろすはずはなかった。平和を求める社会運動が展開され、保守政権に対峙することによって運動が拡大してきたと自負していたからこそ、方針はそのまま続けたのである。

しかし、うたごえ運動を一定程度評価する音楽家からも、運動の性格を変化すべきとの意見が次第に提示されるようになる。そのなかでも特に作曲家の芥川也寸志の意見は大きな影響力を持った。芥川は、うたごえ運動は「庶民の生活に直接結びつけられ」たからこそ発展したのだと評価しつつ、「決して今のままでいいとは言えない」と述べて、理論の必要性、政治闘争ばかりではない運動の形態、「もっと広く音楽専門家の協力を要請し得るような体制を早く作ること」など、より音楽的なレベルを高めることで運動の性格を変化させようとする意見を表明した⁽²³⁾。芥川はうたごえ運動にも関与していた作曲家であり、彼がこのような批判を提言したことの意味は大きかった。

こうした意見を受け、うたごえ運動側も方針を次第に変化させていく。1955年に開催された「日本のうたごえ」祭典では、それまでの平和運動を掲げたスローガンから、「ふるさとの歌を、しあわせの歌を」へとそれを変化させた。人々の生活に密着するうたごえ運動への転換を図ったのである。『うたごえ新聞』に掲載されたよびかけ文には、「うたごえは平和の力／原爆許すまじ」と、平和運動に対する基軸は残しつつも、「私たちの身のまわりでうたわれているうた、そして長い伝統

(22) 『毎日新聞』1955年7月10日、『東京新聞』1955年8月10日、『読売新聞』1955年8月31日夕刊。

(23) 芥川也寸志「『うたごえ』に望む」（『読売新聞』1955年12月7日）。

を持っているふるさとの民謡、平和のうた、明るいうた、闘いのうたをひろめ掘起し創作して“日本のうたごえ”祭典に参加しましょう”(24)と、生活に密着した形での祭典を開催する意思を表明したのである。

こうした変化について、翌1956年には『毎日新聞』が「平和運動として進んできた「うたごえ」が、昨年から純音楽運動としての線を強く打ち出すようになった。それは少なくとも「うたごえ」の雪解け現象として広く歓迎され、一そうこの運動を広めるのに役にたったようだ”(25)と、うたごえ運動が批判を受けて質を転換させ、主張を伴った運動から純粹な音楽運動へとシフトしたと論じた。しかしこの記事はその転換を評価はしていなかった。たしかにこの年の「日本のうたごえ」祭典の進行は「秩序がとれていたが、むしろあまりにも整然と次から次へスムーズに運ばれていった」ため、ステージと参加者の交流も希薄になったという。それを記事は「お行儀がよかった」と評した。この言葉からは、『毎日新聞』がうたごえ運動の質の転換を必ずしも歓迎していない様子がうかがえる。平和運動などの主張を伴ったうたごえ運動の方が、エネルギーを持ち、参加者どうしの交流も積極的に図られていたと見ていたのである。

ここからは、うたごえ運動の性格をいかなる方向へともっていくのか、それを決定することがいかに難しかったかをうかがうことができる。高度経済成長期前までのうたごえ運動の成長は、「政治の季節」を反映して社会運動にコミットしたがゆえに果たされたものであった。しかしそうして拡大したからこそ、政治的であると批判をされる。それに対応して音楽的に運動を転換させれば、それまでの運動が有していたエネルギーが減少していく可能性があった。『毎日新聞』の記事はその点を指摘したものであった。

うたごえ運動側では、世間の批判に対して「日本のうたごえ」祭典のスローガンや性格を転換させただけでなく、運動の内容についても次第に変化を加えていく。まずはサークルとしてのまとまりをいかに構築するのかという点である。うたごえ運動側は、サークルを組織化するような指導を行っていった。具体的には、地域や産業ごとに協議会が作られ、それぞれの連携を強めて参加者を増加させる方策に出た(26)。例えば、炭鉱のうたごえ運動サークルでは「炭鉱のうたごえ」祭典を開催する(27)。そのなかでは、「多くの仲間たちがうけているいろいろな制約や困難を一日も早くなくし、全国の仲間が職場のすみから、社宅のすみから元気一ぱいうたごえのスクラムを組める日が来るように奮闘したい」との意見が出、全国的な交流の舞台・話し合いの場を作ることが目指され、全国協議会結成へと向かっていく。ここには、同じ業種で交流したり悩みを共有する場を設け、それによってうたごえ運動サークル活動を行っていかうとする意識を見ることができるだろう。「日本のうたごえ」祭典ではそれまでも業種ごとの合同合唱を行っていたが、より密接にかかわるための場が運動の転換後に相次いで結成されていったのである。また講習会なども開催され、参加者どうしの交流が図られるとともに、音楽的な技術の上昇も目指された。講習会では懇談の場

(24) 『うたごえ新聞』第7号、1955年9月15日（前掲『うたごえ運動資料集』第2巻所収）。

(25) 『毎日新聞』1956年12月5日。

(26) 門奈由子「1950年代後半の「うたごえ運動」」（『日本女子大学大学院人間社会研究科紀要』第18号、2012年、21ページ）。

(27) 『うたごえ新聞』第12・13合併号、1955年10月24日（前掲『うたごえ運動資料集』第2巻所収）。

なども設けられ、お互いの共通した悩みが吐露されている。この講習会では交歓会と批評会もあり、こうした場でお互いの技術を高め合うような経験がなされていく。うたごえ運動に、討議だけでなく、また技術だけでもない、両者ともに展開される場が用意されるようになったのである。こうしてうたごえ運動は1950年代後半になると、社会運動から生活に基盤を置いたサークル運動へと傾斜していく⁽²⁸⁾。

6 広義の「うたごえ」に関する運動

労働者の合唱がこれまで述べてきた狭義の「うたごえ」に関する運動にすべて包摂されるかという点、そうではない。1948年に発足した全日本合唱連盟は、全国の学校や地域の合唱団が加盟する組織であるが、うたごえ運動とは別のところで展開していた。しかし全く接点を有していなかったかと言うと、そうでもないと思われる。合唱連盟の活動に従事していた指揮者の長井齊は、「職場に於ける合唱を盛んにしたいと希つて居る。その目的の為に、指導者の養成に力を入れたいと思ふ」⁽²⁹⁾と述べるように、合唱連盟では職場合唱に力を入れてコンクールでも職場合唱部門を設け、職場の歌を積極的に組み込んだ形での合唱運動を目指し、積極的に職場合唱の指導に携わった。日本国有鉄道合唱団を率いていた指揮者の秋山日出夫も、『労働評論』創刊2周年記念選抜コンクールにおいて合唱の講評を行っている。秋山はそのなかで、「終戦後における職場合唱の発展は実に驚くべきものがあり」と評する⁽³⁰⁾。秋山は「むづかしい解釈を抜きにして、職場に働らく人達の明るい、そして健康な日常の生活こそ、新生日本のシンボルでなくてはならないと考えてくれば、健康な生活を産み出すための運動が盛んにならねばならぬという事は当然の事であろう」とも述べて⁽³¹⁾、日本国憲法を理念化する文化的生活を営む人々の権利を念頭に置きつつ、職場合唱のあり方を提案していた。合唱団員が集団のなかで人と人との心を通わせ合い、一緒に歌うことの重要性を説くことは、職場のサークル運動として合唱を根付かせようとする秋山の意図があった。うたごえ運動が持つ政治社会性を抜きにして、職場での合唱に取り組むサークルが存在しており、その活動は活発だったのである。

こうした職場の合唱団の高揚に、マスメディアも注目した。毎日新聞社は日本芸能文化センターと共催で、「職場合唱団の相互親善と職場文化の振興を促すため」、産業人合唱コンテストを1958年から開催した。その対象は、工場・会社・商店・公社などの従業員で組織した15人以上の職場合唱団であった。この大会には51団体、約2,000人が参加している。コンテストはNHKが後援し、受賞団体の演奏は録音されてラジオで放送された⁽³²⁾。この産業人合唱コンテストは好評だったようで、翌年の第2回からは東京・名古屋・大阪・福岡で地区大会が開催され、各地区から推薦さ

(28) 河西秀哉「高度経済成長とうたごえ運動」（庄司俊作編『戦後日本の開発と民主主義』昭和堂、2017年、210～215ページ）。

(29) 長井齊「唱連・今年の計画 関西合唱連盟」（『合唱の友』第1巻第1号、1948年、28ページ）。

(30) 秋山日出夫「職場人の音楽と自立楽団 合唱の部」（『労働評論』第3巻第4号、1948年、32～34ページ）。

(31) 秋山日出夫「職場合唱団の現状」（『労働教育』第3巻第2号、1952年、24～27ページ）。

(32) 『毎日新聞』1958年6月30日、7月7日。

れた団体の合唱を録音し、それによる全国大会が開催されている⁽³³⁾。翌年の全国大会からは、録音から東京で実際に演奏される方式に変更された⁽³⁴⁾。このように、職場の合唱団を対象としたコンクールをマスメディアが主催しており、多くの参加者があった。

職場の合唱に参加した人達のなかには、合唱によって「明日の為のエネルギーが与えられるのだ。コーラスこそ唯一の娯楽であり、コーラスは我々の生活の一部である」⁽³⁵⁾と主張するように、彼らのなかにも合唱における「一緒に歌うこと」の意味を高く評価し、それが生活に根ざしたものであることこそ重要であるとの意識が共有されていた。「職場の人々がつどいあつて、楽しみつゝ実効をあげてゆく事」の必要性を説き、職場における合唱運動の効果を主張する意見もあった⁽³⁶⁾。職場におけるレクリエーションとしての役割である。ここでは合唱運動による職場の「楽しみと和合」によって、組合運動の推進力となること、国鉄運営の力となることを主張されるが、それは政治運動の展開というよりも、職場の一体性を構築するために合唱運動の持つ力の重要性を強調したものであった。サークルとしての意味合いである。

このような職場合唱団に参加する人々の意識は、マスメディアでも伝えられた。『毎日新聞』に紹介された京王帝都バス中央営業所の車掌の女性たちは誰からともなく歌うグループを発生させ、次第に会社や組合も公認する合唱団となった。これによって、「トゲトゲしかった職場がいつの間にか明るくなった」という⁽³⁷⁾。このように、職場の潤滑油としての合唱運動というイメージが伝わり、人々に意識化されていく。

このように、職場における合唱運動は、そこに働く人々が集い、一緒に歌うことで個々の主体性を発揮しつつ、一体的になることが目指された。広義の「うたごえ」に関する運動がこうした意識を有していたからこそ、狭義の「うたごえ」に関する運動も、政治社会性から一緒に歌うことへとシフトしていったのであろう。

おわりに

1948年にスタートしたうたごえ運動は、戦前の厚生運動による職場合唱の体験、敗戦後の民主主義文化運動、関鑑子という戦前から著名であった指導者の存在、労働運動や職場への指導などによって急速に全国に広がっていく。共産党の影響を受けて政治社会性を有していたが、うたごえ運動は共産党のコントロール下にあったわけではなく、同時代の動向に大きく刺激を受け、歌を通して平和や民主主義を追求していた。

いわゆる「逆コース」政策は、職場・労働運動に対しても大きく影響する。労働者の団結を「アカ」と見て批判する風潮も強まっていく職場環境のなかで、うたごえ運動は逆に労働者を団結させる作用を持った。一緒に同じ曲を歌い、集い・話すことで、それぞれの思いを共有し合っていくの

(33) 『毎日新聞』1959年5月25日、6月17日。

(34) 『毎日新聞』1960年2月27日。

(35) 大木愛子「生活とコーラス」(『平和文化』第2巻第2号、1948年、17～20ページ)。

(36) 大河内達八郎「職場合唱の提唱」(『SENDAI』第1巻第1号、1949年、30～32ページ)。

(37) 『毎日新聞』1954年12月11日。

である。このように一緒に歌うことに重点を置くうたごえ運動の姿勢が、全国へと運動が定着していく背景にあった。また「逆コース」によって社会運動・平和運動が高揚したことも、うたごえ運動が広がっていく要因となった。そうした運動のなかで、主張を展開し運動を盛り上げるためにうたごえが用いられた。

こうしたうたごえ運動の定着がマスメディアで紹介され、次第に批判意見も展開されていく。うたごえ運動側はその批判を受け止め、政治社会的な主張ではなく、生活を全面的に押し出す方針へと運動を転換する。そして、サークルとしてのまとまりをより重視する方向性を打ち出し、一緒に歌うこと・集うことを強調する言説がうたごえ運動側から積極的に発表された。それは、高度経済成長を迎え、人々の暮らしが次第に意識化されたがゆえの転換であったとも思われる。

しかし、1950年代前半までのうたごえ運動は、「政治の季節」を反映して社会運動にコミットしたからこそ繁栄した側面もあった。そうして拡大したから政治的だと批判されたのである。ところが、一緒に歌うことを前面に押し出すと、エネルギーが減退したように伝えられる。これは運動が持つジレンマの一つでもあった。

一方で、同時期にはそうした狭義の「うたごえ」に関する運動には参加しない、職場の合唱サークルも数多く存在した。政治社会性よりも、職場におけるレクリエーション、仲間づくりの側面を重視したものである。こうした土壌が労働者の合唱に存在したからこそ、うたごえ運動がその方針を1950年代後半に転換させていくことができた。労働者による広義の「うたごえ」に関する運動をも含めて、この時期に運動は広く展開されていたのである。

（かわにし・ひでや 神戸女学院大学文学部准教授）